
梅雨戦線

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

梅雨戦線

【Nコード】

N3579C

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

梅雨の季節。今年四歳になる女の子、たえちゃん。どこにでも居そうなアニメ好きな女の子だけれど、実は他人とはちょっと違う秘密があるんだ。それは……。

あじさいの葉の上をカタツムリが這う様を、少女が眺めていた。

まるで、世の中の色を全て混ぜたような暗い暗い空の色。その空から零れ落ちる、透明な水滴の数々。その水滴を跳ね除け、ただただ朴然と立つ黄色い傘。そして、その下で、雨に濡れるカタツムリを眺める少女。そして、その少女の履く赤い長靴の下には、雨粒が集まってできた水溜りが、雨の波紋を写し取る。

カタツムリは、少女にダンスを見せるようにアジサイの葉の上で動き回る。

少女は、そんなカタツムリを指で突つついた。すると、カタツムリはその機嫌を損ねたのか、背中に背負う巻貝の中にこもってしまった。

「あゝあ」

その少女は、残念そうに、声をあげた。

しかし、そんな少女の声は雨音にかき消され、あたりはまるで何事もないかのように静まり返っている。

「おい、たえちゃん」

少女から少し離れたところに、少女よりはるかに背丈の大きな人影が見える。大体5mくらいしか離れていないのだろうが、雨がその輪郭を消しにかかっているせいで、人影程度にしか認識できない。その人影は、低い声を響かせて言った。

「おい、たえちゃん、聞いてる？もう帰ろう？あんまり雨の中を歩くと、風邪引いちゃうからさ」

たえちゃん、と呼ばれた件の少女は、その人影に言葉を返した。

「パパ。あと、もう少しだけ」

たえちゃんは、その指でカタツムリの貝をノックしていた。出ておいでよ、いじめないから。

一方、パパと呼ばれた人影は、たえちゃんの横に立った。そして、

かがみこんでたえちゃんの頬を撫でる。

そして、言った。

「たえちゃん、カタツムリをいじめちゃダメだよ」

「えーあたし、いじめてないもん」パパの言葉に、たえちゃんは気色ばんで反論する。するとパパは、まるで大事なものを扱うような口調で言った。

「たえちゃんはいじめてない、と思っていても」パパは指を立てて続ける。このポーズはパパが子供を叱るときの恒例のポーズだ。「カタツムリさんにとっては、痛いんだよ？そうやってつんつんされるのは」

たえちゃんは、パパの言うことは本当かしら、とばかりにさつと貝をつつく指を引いた。しばらく見ていると、カタツムリは貝からその頭を出した。

「ね？」パパは続けた。「きつと、カタツムリさんは、たえちゃんの指が怖かったんだ」

たえちゃんは、むむむ……と言いたげな、すっぱい顔をしている。パパは、そんな自分の娘をほほえましく思いながらも、続けた。

「たえちゃん。謝んなきゃね？カタツムリさんに」

たえちゃんは、パパの顔を覗きこんだ。ちよつと不機嫌そうな、そんな顔をしながらも、頷いた。

「……ごめんなさい」たえちゃんは、まるで大団扇でゆっくりと扇ぐような、そんなお辞儀をした。

カタツムリは、まるでたえちゃんの謝罪にあわせるように、角を出した。すると、たえちゃんの顔は一気に夏の太陽みたいな顔になった。ニコニコ。

パパは、そんなたえちゃんの小さな手を持って、語りかけた。

「ね？パパの言ったとおりでしょ？」

「うん！」

六月の空気に似合わないたえちゃんの笑顔を、パパは真夏の太陽

を見るような目で眺める。

「さて、と……」　パパは、たえちゃんの手を握ったまま、立ち上がった。「もう、行こう？風邪引いちゃうよ」

ちよつと不服そうな顔をしたたえちゃんだったけれど、すこし間をおいてから頷いた。

パパとたえちゃんは、雨の小道を歩き始めた。しとしと降り注ぐ雨。そして、どこか雨の陰気な空気によって沈んだような街。

だが、こういった梅雨っぽい天気がやってきたのは、随分久しぶりのことだ。

ここ4年、梅雨がどうにも季節通りに行かないのだ。4年が4年、「カラ梅雨」の傾向を見せている。

今年も「カラ梅雨」とのことだ。今年はやけに北の気団が強く、梅雨前線が北上してこない、ということらしい。

世間では、やれ異常気象だ、やれ地球温暖化の影響だ、ならばCO₂を削減せねば、と騒がれて久しい。

けれど。パパは、雨の道を歩きながらため息を吐いた。実は、パパにはその本当の理由がわかっているのだ。それは……

パパは、自分と手をつなぐ、今年4歳になるたえちゃんを眺めた。
（きつと、この子が、“お役目”を果たして

いないのだ。）

そう頭の中で考えた。

この子はまだ幼い。だからきつと、“奴ら”に丸めこまれているんだろう。

パパは、思い切つてたえちゃんにカマを掛けた。

「なあ、たえちゃん。なにか、パパに隠し事してないかい？」

さすが4歳児。たえちゃんは見事にカマに怯え、体をのけぞらせた。そして顔を覗き込むと、明らかに気まずそうな顔を覗かせている。もし、この世界がマンガだったとしたら、きつと「ドキッ！」とか「ギクッ！」とかいう言葉が宙に踊るのだから、とパパは

思い、少し笑った。

そして、とどめがこれだ。

「……………な、なにも、隠し事してないよ……………」

……………絶対に、隠し事してるな、コイツは。でも、頭ごなしに訊いてもよくない。ので、パパは搦め手から攻める事にした。

「よく聞いてね、たえちゃん。隠し事は」子供のうちは、とパパは心の中で付け加えて続ける。「良くないよ？」

「……………でもあたし、か、隠し事なんてしてないもん」

「隠し事」というところで声が裏返ったたえちゃんを、パパはほえましげに眺める。でも、ちよつとだけ真面目な顔になって、諭すように言った。

「うん、そうだね。でも、もし隠し事しているなら」パパはさらに優しげな口調を続ける。「早くしゃべっちゃった方がいいよ」

「な、なんで？」と怯えと微かな好奇心を込めた声で、たえちゃんは聞いてきた。

「それはね」パパは答えた。「隠し事を一人で抱えてると、重くなっちゃうからね」

「……………わかった」たえちゃんは、下を向いて押し黙った。そんな我が娘を上から眺めながら、パパはちよつと笑った。

雨と傘がぶつかるパラパラ、という音だけが、その場を支配するかのように響いた。

【1】（後書き）

皆様のご批評、ご感想お待ちしております。

家に帰りつくと、パパはしかめっ面を覗かせながら書斎に消えた。あの部屋にパパが入るときは、ロクなことがない。しかも、しかめっ面で入った場合、ほぼ間違いない。

パパは、子供を叱るとき、感情的には怒らない。論理的に怒るのだ。でも、パパは瞬時に筋道立てて怒れるほどには頭がよくないらしく、いつも書斎でその論理を考えているのである。

そんなパパの都合をたえちゃんは知る由も無いけれど、「あの部屋にパパが入った後は大抵怒られる」というパターンはすっかり理解していた。噴火直前のパパの後ろ姿を見送ったたえちゃんは、ママへの「だだいま」の挨拶もそこそこに、子供部屋に入っていた。「困ったなあ。きつと、パパ、気づいてる……」

子供に似合わない、冷静な口調でばやくたえちゃん。腕を組み、子供部屋の真ん中でウンウン唸る。

隠し事はよくない。でも、「二人」が隠しとけ、って言うんだからしょうがない。でも、きつとパパはあたしが隠し事していることを感づいている。きつと、怒られる。まるで、0点を取ったパティちゃんみたいに。

と、たえちゃんは最近子供の間で流行っているギャグアニメ「パティちゃん獄遊記」の主人公で、いつも怒られてばかりのキャラクター「パティちゃん」を引き合いに出して、ため息を吐く。

ちなみに、「パティちゃん獄遊記」はギャグアニメだから、かなり怒られるシーンは大げさだ。例えば、学校の先生が拳骨をくれるシーンがあるが、これを実際の学校の先生がやってしまったら大事だろう。というか、その程度によっては、実の親でさえ警察沙汰になりかねない世の中だ。だから、たえちゃんが感じている「怒られ

る」という恐怖は、かなり割り増しされていると考えたほうが良い。でも、子供にとつて、アニメの世界は実際の世界とあまり境目がない。たえちゃんにすれば、ある日突然パパが「パティちゃん獄遊記」の先生のように、手を上げて叱ることだつてありえない話では無いのだから。

たえちゃんは、ガチガチと、まるでバイブモードで鳴っているケ―タイのように震えだした。
すると……。

「おい！何ガクブルしてんだよ」「全くである！」
と、たえちゃんしかいないはずの子供部屋に、明らかにたえちゃんとは違う声が響いた。ガチガチと震えながら、たえちゃんはその声に答えた。

「……パパに怒られる〜！！」 声まで震えていた。
すると、その声たちはカラカラと笑つて、口々に言った。

「なんだ？お菓子でもつまみ食いでましたか？」「まったく、お子様である！！」

そんな声に、たえちゃんはキツと視線を向け、言った。

「違う！あなたたちのことが、パパにばれそうなの！！」

「な、なに！？」「困つたである！！」

今度は、声たちの方が慌てだした。口々に、「やばい！」「しまつたである！」「などと騒ぐ。まるで、空転する国会のような白々しさだ。そんな喧騒にイライラしたのか、たえちゃんは声を荒げた。

「ちよつと、静かにしてよ！！」

「ご、ごめん」「スマンである」

声たちは、明らかにしよげ返つた。

たえちゃんは、ため息を一つ吐いて続けた。今度は静かな口調で。
「でも、どうしよう……」

「決まつてる」声の一人は言った。「隠し通す！これだ」

「同感である！」もう一人も言った。「白を切りとおす、これしかないである！」

そんな、“二人”の言葉に、たえちゃんは呆れたようにため息を吐く。そして、弱々しい声を発した。

「……あのパパ相手に、隠しとおせる自信ないよ……」
「ど、同感である。そういえば……」「うん、そういえば、アイツ、昔からカンが鋭かったもんなあ……」

声の“二人”は、口々に同意する。

まったく、さつきは「隠し通せ」って言ってたくせに……。とたえちゃんは少々カチンとくる。

「ところでさ」 たえちゃんはその怒りをかみ殺して切り出した。

「姿、見せてくれない？姿が見えないと、どこに視線を向けて会話していいかわからないからさ」

「それは確かに」「正論である!!」

そう二人は口々に言い、タンスと机の間から出てきた。

さつきからたえちゃんと会話していたのは、小人だった。

だいたい、たえちゃんの親指くらいの大きさくらいしかない。一方は赤い服をまとい、もう一方は青い服をまとっている。赤いほうは、なんとなく小太りで、青いほうと比べると小さい。青いほうは赤いほうに比して痩せている。要は、赤いほうはちびデブ、青いほうはやせノツポ、といったところだ。

赤いほうが、自分の存在感を補うかのように、ジャンプしながら言った。

「しかし、どうするである!!」

すると、赤いほうにたえちゃんは聞いた。

「ねえ、でもさあ？そもそも、パパにあなたたちの存在を隠す必要があるの？」

赤いほうも青いほうも、体をのけぞらせた。

あれ？こういうときには「ギクツ!!」って言葉が空に浮かぶんだけどなく、とたえちゃんは思った。でも、それはアニメ、マンガの世界での話だね、たえちゃん。

「……ダメなんだ」 青いほうが言った。「パパにばれちゃ

「……ふん」興味なさそうに、たえちゃんは言葉を返した。

【2】（後書き）

皆様の、ご批評、ご感想お待ちしております。

この小人の二人組が、たえちゃんの元にやってきたのは、六月上旬、ちょうど梅雨入り直前のことだった。

その日も、たえちゃんは六畳ほどの子供部屋で、おもちゃ箱をひっくり返して積み木やらお人形さんやらを取り出し、盛大に遊んでいた。「パティちゃん獄遊記」の世界でこういうふうには部屋を散らかすと、校長先生というキャラクターが雷を落とす。だけどたえちゃんの世界の場合、その校長先生の役割はママに代わる。

「たえちゃん！お部屋汚すぎ！早くかたしなさい！！」

ママのそんな悲鳴にも似た金きり声に怯えながらも、たえちゃんはハア、とため息を吐いた。

「いつの間に……こんなことに……」

たえちゃんが子供部屋を見渡すと、部屋中いっぱいにおもちゃの海が広がっていた。床の上にも、机の上にも、どうやって置いたのかはわからないが大きなタンスの上にも、おもちゃがすっかり散乱している。

かたすのめんどくさいなー。やだなあー。でもやらないとママが……。

自分のぐうたら心とママへの恐怖を天秤にかける4歳児。

むむむ……、ママ、怖いしなあ……。ちょっと、「ママへの恐怖」の方へ天秤が振れた。

でもー。やっぱり面倒なんだよねー。あ、「ぐうたら心」の方へ、天秤が傾いた。

ぐわんぐわん振れるたえちゃんの天秤であったが、そのうち、「ママへの恐怖」の方が重いことに気づいたたえちゃんであった。

ま、子供ってというのはこういうモノである。やっぱり、ママは怖いのである。逆に、ママの小言が怖くなくなってしまったとき、子供はまた一つ大人に近づくのだろう。まだまだ子供のたえちゃんは、

ママへの恐怖に急かされるように、たえちゃんは部屋に散乱しているおもちゃを拾い、おもちゃ箱に入れていく。お人形さんや積み木が、無造作に箱の中に消えていき、それに反比例するようにおもちゃの海も消えていく。

そして、大方のおもちゃを片付け終わった、そんなとき、ようやくたえちゃんはあることに気づいた。

「あれ？なに、これ？」

たえちゃんの視線の先には白い壁がある。だが、いつもと違う。いつもは、降り積もった雪のように寒々しい白の壁紙なのに、ちょうどたえちゃんの視線の高さの壁だけ、やけに黒ずんでいる。

しかも、その黒いしみは心臓のように脈動を繰り返し、少しずつ大きくなっていく。脈動を繰り返すうち、しみの黒い色はどんどんその深みを増していく。

闇夜のような、深い黒。そのしみを、ただたえちゃんは呆然と眺める。

そして、そのしみの黒色が、これ以上ないほどに深く沈んだそんなとき、その黒いしみから光が漏れ出した。闇を割る光。闇に目が慣れていたたえちゃんには、とんでもなく強い光に見えた。

「ま、まぶしつ……」

その光は、たえちゃんの網膜を焼き、その視界を真っ白に染めた。「はは、まったく、半年ぶりか？」「うむ、秋ぶりであるからだいたいそのくらいである！」

目が見えないたえちゃんの耳には、見慣れない声が響いていた。なに？この声？

ようやく目が慣れたたえちゃんは、部屋の中に、二つの見慣れない人影を見つけた。だが、その大きさは、まるでお人形さんくらいの大きさでしかなかったのだが。それが件の、赤いちびデブと青いヒョロ男の小人二人だった、という次第なのだ。

二人は丁重にお辞儀をした。「よ！半年振り！」「久し振りである！」「丁重なお辞儀とは裏腹に、ざっくばらんな挨拶であった。」

だが、たえちゃんは全く覚えていない。だれ？これ？

と、いうのも、最近までたえちゃんは物心がついてなかったのだから、二人のことを覚えていないのもしょうがない。たえちゃんは、困ったように頭を掻いた。

二人も、同じ感想を持ったらしい。たえちゃんの、「？」と言わんばかりの顔を見て、二人はため息を吐きながらも、自己紹介を始めた。

「オレは、オホーツクだ」青いほうはそう言った。

「我輩は、小笠原である！」赤いほうはそう名乗った。

「うーんと、大槻、と、おが屑屋？」たどたどしい口調でたえちゃんは繰り返した。

すると二人は、地団駄を踏んで反論する。

「オホーツクに！」「おがさわら、である！！」

「ふんふん、大槻、に、おが屑屋、ね」やっぱりわかっていないたえちゃん。

「だ〜か〜ら〜！！！！」二人は声を合わせて反論する。「オホーツク！」「おがさわら！」

しばらくキョトンとしていたたえちゃんだったが、ポンと手を打って言った。「ああ、北海道の特急と、野球選手！」

二人は、顔を見合わせてから、たえちゃんを見据えて言った。「それは、『特急オホーツク』と、『小笠原道大』！！なんか、子供のクセに、お前渋いぞ」

「ていうか」小笠原が言った。「両方とも、北海道ネタである！」

「え？違うよ？」たえちゃんは、無垢な声を発した。すると、赤いほうはたえちゃんの方を向く。

「え？小笠原は北海道の日 八 であろう？」そう、赤い小人は訊いた。

だが、たえちゃんは、頭を振った。

「ううん。今、小笠原はジャ ア ツにいるもん」やけに、野球に詳しいたえちゃんなのだ。すると、赤いほうは目を睜みはらせた。

「な、なんである！？あの、小笠原が……！？」肩を落とす赤い小人。小人のクセに、野球が好きなのだろうか。

とにかく、オホーツクと小笠原を名乗る小人二人組が、たえちやんの前に現れたのである。

【3】（後書き）

皆様の、ご批評、ご感想お待ちしております。

その二人組、オホーツクと小笠原はこう言った。

「きつとお前は覚えてないだろうから言うけど、オレたちのことをパパやママにしゃべっちゃダメだぞ！」

なんで？とたえちゃんが訊くと、二人は答えた。

「・・・何でも、である！！いや、むしろ、しゃべったらママに怒られるである！！」

・・・マ、ママに！？は、はい！黙ってます！！と素直に答えるあたり、たえちゃんはまだまだ子供であった。

たえちゃんは二人に視線を合わせるように、床に寝転んだ。ちなみに、ママの目の前でこれをやると、「なにもつともないことしているの！？」と大目玉を食らってしまうのだが、今たえちゃんは二人との会話に夢中で、そんなことすっかり忘れていた。

でさ。とたえちゃんは切り出した。

「あなたたちは、なんなの？妖精さん？それとも、コロポツクルの類？それとも、ドワーフ？」やけに、妖精の類に詳しいたえちゃんたえちゃんの頭よりも、はるかに小さな頭身の二人は、また顔を見合わせた。「それも忘れてるのか？」

「うん！」こう答えたたえちゃんの顔は、100万ドルの笑みだったそう。

「まったく、しょうがねえな・・・」オホーツクは頭を掻いて、トクトクと説明し始めた。

そのシベリアの説明がトンデモなく長いので、ここでは割愛させていただきます。彼の説明は確かに正確なものなのかもしれないが、説明、という作業にはある程度正確さを犠牲にしても伝えねばならないものがあるはずだ。だが、彼の説明は正確さが命で、その「伝えねばならないこと」が見事にぞんざいなのである。要するにシベ

リアの説明は、くどい上、言いたい事が伝わらないというどうしようもない説明であったのだ。たとえ、訊いている人間が物心がついている人間であったとしても、右耳から入って左耳から抜けてしまいいそうな……。

皆様には、そのダイジェスト版を御覧頂こう。

オホーツクの説明を要約すると、「自分たちは、空の『気団』の代表である。『気団』とは、空の上に住む空気の精が作り出した国のこと。そして、自分たちは空気の精なのだ」といったところだ。

たったこれだけの説明を、自分のひいひいじいちゃんの思い出話を引き合いに出したり、伝説のドラゴン退治などを織り込んで、正味一時間の大スペクタクルに仕立てあげたのである。ある意味、才能と言える。

「……と、言うわけだ！わかったか!？」

オホーツクが肩で息をしながら、額の汗を拭いてたえちゃんに訊いた。だが、既にたえちゃんはスースーと平和な寝息を立てて寝入っていた。

オホーツクはたえちゃんの耳元に駆け寄り、耳たぶを掴んで叫んだ。

「おい！起きろ〜!!」

「ん〜、むにゃ……、あ、あれ？おはよう。話終わった？」たえちゃんは上半身を立ち上げ、ぐぐつと伸びをした。

「あのなあ！お前、全く話訊いてなかったらう〜!!」

ビービー騒ぐオホーツクをよそに、たえちゃんは目をこすりながら言った。

「ん〜？要は、あなたたちは空気の精さんなんでしょ？」

要点だけはしっかり押さえている、聞き上手なたえちゃんのだった。

そして、なんだかんだで一ヶ月、この子供部屋に、「空気の精」を名乗る二人が住み着いているのである。

でもなあ。二人の小人を眺めながら、たえちゃんは思うことがあ

った。

(このヒトたち、なにしにここに来ているのかな?)

だって、この二人、なにをしているわけではないのだ。

子供部屋でダラダラしているか、相撲をとって遊んでいるか、かくれんぼをしているか。まるで、我が家でくつろぐかのような二人に、たえちゃんは少々歯軋りする。

「おい、たえちゃん！テレビ見ようぜ！ほら、『パティちゃん獄遊記』 始まつちゃうよ！」

オホーツクが、体を横たえながら言った。

「あ、はいはい！」

たえちゃんはトテトテと子供部屋を歩き、テレビのスイッチを押した。

「おお！やつてるやつてる！！！」

テレビには、主人公パティちゃんが学校に向かう様子が写された。

「ふん、子供騙しである！」 小笠原は、そっぽを向いた。

パティちゃんはまたまや0点を取ったらしい。先生にこっぴどく叱られている。だが、その0点のテストが風に飛ばされ……。

「お、おいおい！パティちゃん、気づけよ！！ほら、テストが！！！」

そんなオホーツクの叫びはパティちゃんには届かなかつた。……

・・当たり前だけど。

パティちゃんのテストの答案は風に吹かれ、窓の外に消えていった。そしてその答案はしばらく校庭をさまよっていたが、“運悪く”校長先生の部屋に入り込んだ。そして“おあつらえ向きに”、校長先生の机の上に着地した。

「あわわわ……。やべえよ！」

すっかりテレビに感情移入しているオホーツクの横で、そっぽを向いている小笠原も、ちらちらテレビの画面を見ている。「子供騙しである！」って言った割に、やっぱり興味あるのだ。小笠原のチラ見も、どんどん頻度が上がっていき、もう普通に見たほうがいいんじゃないかしら、と周りに思わせるほどになっていた。

「しっかり見たら？」見るに見かねたたえちゃんは、小笠原に言った。すると、小笠原は無言でそれに従う。たえちゃんはなんだか嬉しくなった。

テレビの画面には、答案を持ちながらワナワナ震える校長先生の姿が映っている。校長先生の目がキラーンと光り、背後に雷がドツカーンと落ちた。

「あゝあ、もう、だめだ……」シベリアは頭をふった。

そうなのだ。このように、校長先生の目が光ったときには、必ずパティちゃんが叱られる。そういうパターンなのである。果たして、校長先生は、「殺」と書かれたハチマキを巻き、日本刀を抜いて、パティちゃんのクラスに乱入した。「パティちゃんは、どこどこだ」とか言いながら、きよろきよろとパティちゃんを探す。

「パティ、逃げる!!」

やっぱり、そんなオホーツクの叫びは届かなかった。当たり前だけど。

校長先生は、鷹のような目でパティちゃんを見つけ、追いかけてめた。当然パティちゃんは逃げ出すから、追いかけてこの格好になった。

「はっはっは!!」

テレビの画面を眺めている三人は、合わせたかのように揃って、どっと笑った。

テレビの画面には、校長先生の目から出るビームをダッシュで避けながらも必死でボケる、主人公パティちゃんの姿があった。

一方その頃、パパは書齋に籠り、和綴じの古びた本を読んでいた。背表紙には、「雨行司之事」あめぎょうじのことという題がついている。まるでミミズが張ったような文字。江戸時代の書き物は太抵崩し字で書かれているので、慣れない人は読むのにすごく難儀するのだけれど、パパは「崩し字辞典」を片手にすらすらと読み進むのであった。

「どうにも、わからんなあ」
 パパは、書齋の真ん中に置いてある、ふかふかの椅子に座り込んだ。

昔一応一読した「雨行司之事」だが、殆ど斜め読みだったからなあ、と、猫の額ほどの書齋の真ん中で、一人苦笑する。

「雨行司之事」は、パパの家に代々伝わる書物だ。「享保3年これを記す」との記載があることから、江戸時代中期の書物であろう。突然だが、パパの家、つまり、パパとママ、そしてたえちゃん一家の苗字は、「雨行司」という。珍しい苗字である。よって、「あまぐうじ」とか「うこうじ」とか読み間違えられたり、「雨行寺」とか書き間違えたりされる。そのたびに家族のみんなはイライラさせられるのだが、それはまあいい。とにかく、たえちゃん一家は「雨行司」と書いて、「あめぎょうじ」と読む。

だが、名乗ってるほうとしてはフラストレーションが溜まる一方の「雨行司」家には、ちよつとした秘密がある。

実は、雨行司家は“雨行司”という役目を、1000年以上に渡って遂行してきた家系なのである。

日本は、弥生時代の昔から稲作を展開し、それによって国の形を作ってきた国である。日本列島の大半は元々湿潤な気候だったから、水稲耕作が発達したのである。だが、いくら「湿潤」とは言ってみたとところで、その年その年、降雨量は変動する。天候というやつは、人間が作った社会システムほどには正確なものではないのである。

だが、社会システムを運営する側にとって、それでは困る。降雨量が気まぐれでは、作物の収穫量、ひいては社会システムを運営するための 税と言う名の 資本も変動してしまうからだ。「それが為……」と「雨行司之事」は続ける。

『ある帝の御時にか、左の大臣の命を受けし法師、移ろい易き梅雨、秋雨を操らんとす。トするに、天に住し二の神国の戦の果梅雨、秋雨に響す。

法師、二の神国の王を呼びて曰く。相撲すまいせよ。我、行司す。その果によりて雨足を決められたし。

よりて、法師、雨行司を名乗れり。』

大分所々はつきりとはしないが、こういうことである。

『いつの時代かは定かではないが、左大臣の命令を受けた法師が、雨量がはつきりと決まらぬ梅雨と秋雨を操ろうとした。梅雨と秋雨の原因を占ってみると、どうやらその原因は、空の上に住む“精”が作った二国間の、戦争の結果によるものだ、ということがわかった。その法師は、争っている二国の精の王を呼び出して、言った。「戦争なんてしないで、相撲を取れ。俺が行司役になる。その相撲の結果で雨足の量を決めろ」
このようなことがあり、法師は雨行司を名乗った。』

この記述が正しいかどうかはわからない。そもそも、「いつの時代かわからない」と断っている時点で、作り話の二オイがぶんぶんする。

だが、案外この話も本当なのかもな、とパパは考えている。なぜなら、雨行司家の者には見えるのである。え？なにが、って？「空に住む“精”」の姿が、である。

いや、正確には、「子供のいない」、「御役目を背負った」雨行

司家の者には、である。パパも昔は見えたのである。だが、たえちやんが誕生してから、全く見えなくなってしまった。多分、子供の砌にしか見えないのだろう。

とにかく、雨行司家は、代々空の精の「代理戦争」の行司役を執り行っていたのである。「雨行司之事」はさらに続ける。

『雨行司、肩入れす。

神らの相撲すまい、もとより伯仲。されど、ばらつきあり、左様の時に限りて行司の都合にて相撲すまいの果、操す。

よりにて梅雨、秋雨操りしこと叶えり。』

つまり、雨行司は、精の相撲の戦果を出来るだけ伯仲させて、梅雨を長引かせるようにしていた、ということなのだ。パパ自身も雨行司の役目を10年以上勤めたからわかるのだが、大抵、空の精の相撲は一進一退、ほぼ互角なのである。ただ、梅雨の時期は赤い精が少し強く、秋雨の時分には青い精が強い。そのように、一進一退の相撲を取ってくれているときには、例年通りの梅雨になるのだ。

だが、年によっては例外もある。なぜか赤いほうが異様に強い時もあるし、逆のこともある。そういうときには、どちらかが大勝してしまう。すると、「カラ梅雨」になってしまうのだ。

なので、こういう例外のときには雨行司が相撲の戦果を操るのだ。戦果を出来るだけ伯仲させ、雨を降らせるために。

だが、やつらもちちらの狙いはわかつている。だから、雨行司を出来るだけ懐柔しようとする。「正々堂々相撲が取りたいんですよ！」とか言ってる。

どうやらこの相撲によって、空の上の国の勢力図が変わるらしいので、向こうもけっこう必死なのだ。多分ではあるが、きっとその相撲の結果によって、領土（領空といふべきか）の範囲が大きく変わってしまうのだろう。

だが、こちららも必死である。

梅雨が不順だと、農業に大きな打撃を受けてしまう。こちらはこちらの都合で大変なのだ。

つまり、この「空の精による相撲」は、空の精二国間の代理戦争に、人間が介入しているのだ。そして、その三者三つ巴の「戦」なのだ。

そんな大役を、きっと娘が果たしているんだ。でも……。

ここ数年の、「カラ梅雨」を考えるに、パパの心は重くなった。

きっと、たえちゃんは、奴らに懐柔されているに違いない。

ママが言うには、こここのところたえちゃんは子供部屋にこもったまま出てこない、心配になって観に行くと、変なところに視線をやって、一人でおしゃべりしている、とのことらしい。ママは雨行司の事情を知らないからわからないが、パパにはわかった。

たえちゃんのところは、空の精がやってきている。

たえちゃんが今の雨行司である以上、お役目はキチンと果たさねばならない。

パパは、椅子の上でまた深い深いため息を吐いた。

【6】

でもなあ。パパは、椅子の上で「雨行司之事」に目を通しながら唸る。

どうやって、雨行司に介入しようか……。

例の相撲には、三者しか参加できない。青い精1人と赤い精1人、そして雨行司1人のみ。

精たちがどのように選ばれているかは知らないが、少なくとも雨行司になるためには条件がある。一つは「雨行司家の内、まだ子供がいない者」であり、あともう一つは、「精たちの姿が見える人間」という条件なのである。どうしたわけかはわからないが、精たちの姿が見えるのは、雨行司家でもただ一人だけなのだ。まさか、見えない相撲の行司などできようはずもないから、結局雨行司には「精が見える」ことが絶対条件になる。

しかも、性質が悪いことに、かつて雨行司をしていた者でも、自分の子供ができてしまうとその力を失ってしまうのだ。どうやら、自分の子供が生まれると「精を見る力」が消滅するようになっていくらしい。

つまり、かつて雨行司をしていたとはいえ、子供が生まれたことで、精たちを見る力を失ってしまったパパでは例の相撲に参加できないのだ。

しかも、である。雨行司家には、ある決まりがある。それは……。「雨行司のお役目のことを、むやみに口にしてはならない」という、しきたり。

もし、外野が相撲の裁定に口出しをしていいなら、これ以上楽なことはない。雨行司に結果を教わって、それを分別ある大人が判断、そしてその判断を雨行司が自分の判断として宣告すればよい。

だが、雨行司家の決まりのせいで、まったくそういったことが出来ない。しかも、「もし口を出そうものなら、飢饉が起こる！」と

まで言われている。多分、本当なのだろう。

パパが「雨行司之事」を引つ張り出してきたのには訳がある。

この「雨行司之事」は、雨行司家が代々伝えていた「雨行司」のしきたりや伝説、そのコツについて書かれたものであるが、一方で雨行司家の歴史を記した歴史書のような側面もある。パパはここに着目したのだ。

ご先祖様は、こういうとき、どうやってお役目を果たしていたのだろうか？

やはり、こういった儀式の類においては、先例が頼りになるのだ。この「雨行司之事」を著したと思われるパパのご先祖様も、そこらへんをすっかり心得ていたのだろう。今手にもつ、ボロボロでちょっと触っただけでも崩れそうな和綴じ本が、やけに愛しく思えるパパなのだった。

だが……全く記載されていなかった。

わかったことは、どうやらご先祖たちは、雨行司の役目に就いた者は一生結婚させず、出来るだけ子供に雨行司をやらせないようにしていたらしい。

それでも、世代交代はある。分別のない子供が雨行司だったこともけっこうあったらしい。

だが、こういうときにご先祖様たちは……どうやら「諦めた」らしい。分別ある大人になるまでは、「しょうがない」と投げていたらしいのだ。

うーん、我がご先祖ながら、なんて身勝手な……。パパは頭を掻いた。

だが、しょうがないのかも知れない。

そもそも、この「雨行司」というお役目自体、天候を操るといって人間の分からはるかに逸脱した行為なのだ。当時の人たちの感覚からすれば、「天候を操れて儲け物」という程度の認識だったのかもしれない。だからこそ、50年のうち数年くらい天候が不順でも「しょうがない」と諦められたのだろう。

だが、今はそうは行かない。この少子化の時代、雨行司のお役目のためだけに子供をひとり多く作るなんて、豪奢もいいところだ。それ以上に、家のしきたりのためだけに生きる子供なんて、かわいそうなことこの上ない。だが、かといって現在ののように25年くらいのスパンで雨行司が変わってしまうと、天候不順の年が増えてしまう。

つまり。パパは心の中でつぶやく。

新しい時代に即した、「雨行司」のあり方を模索しなくては。

パパは読んでいた「雨行司之事」を閉じると、机の上においてある桐の箱の中に収めた。この桐の箱は先々代の雨行司、パパのパパが作らせたものだ。けっこう値が張ったらしいが、おかげで中身が現在まで原型をとどめている。パパのパパの見識に少し感謝しながら、パパは桐の箱に蓋をし、元の場所に収めた。

「でもなあ……」パパは思わずつぶやいた。「どうしようかなあ。どうやって……」

パパは思わず書斎を見渡した。パパが買い集めた本。でも、どれもこれも、役に立ちそうもない。まあ、どの本も重厚な歴史小説ばかりだからだったりもするのだが。パパは椅子から立ち上がり、何の気なしに本棚に入っている本を抜き取った。どうせ役には立たないだろうけれど、目を通さないよりはマシだ。そうパパは考えたのだ。

パパが抜き取ったのは、「サラバ戦争！」というタイトルの新书だった。

某超大国による某国への武力攻撃以来、世界中、あるいは出版業界で吹き荒れる厭戦ムードに乗っかる形でベストセラーになった新书で、「犬も歩けば『サラバ戦争！』」を読む人に当たる」というジョークさえ生んだ本である。

だけれど、本を読みなれてるパパとしては、内容もスカスカ、論旨も新しさのない「戦争反対論」が展開されており、700円も出した価値ないなあ、と後悔した本だ。だから、パパの本棚の中でも、

「面白くなかった本」の棚に置かれていた。

「はあ……こんな本、手に取ってもなあ……」

それでもパパは、その本を、手に取った責任だ、とばかりにパラパラとめくり始めた。やっぱり、この本、買ったのは失敗だったなあ。パラパラめくりながら、パパはげっそりとした。

本を読む、というのは自分の知的好奇心を満たすために行なわれるものだ。だが、この本には「ああ！なるほどね！」という驚きもなければ、「こういう考え方もあるよね！」みたいなセンスオブワンダーみたいなものもない。多分、この著者の方、思考停止してるんだらうな。と思わせるに十分な本であった。

しかし、こんな本をパラパラとめくるうち、ある考えがパパの頭に浮かんだ。

「待てよ……？もしかしたらこの本……」

パパは視線を本から外し、そのままの姿勢で頭をフル回転させる。もし、マンガの世界だったら、パパの頭から「カチャカチャカチャ」と機械音が響くのだろうけれど、この世界はマンガの世界ではない。要は、そんな音がしそうなくらい、パパの頭はフル回転している、ということだ。

「……使えるかもしれない」

この世界はマンガの世界ではないので、「チーン！」という音はしない。だけど、とにかく、パパは思い浮かんだのだ。

雨行司の裁定を、何とか操る方法を。

パパは、早速机の引き出しから紙とペンを取り出し、何かをポリポリ書き始めるのだった。

「うお〜！！パティちゃん！！逃げるであるウー！！」

パパが書齋でポリポリ何かを書いている、ちょうどそんな頃、子供部屋の空気は明らかにエキサイトしていた。テレビの画面の中では、パティちゃんが校長先生はじめ、警察や軍隊に追われている。いつの間にかこんな大事になったのだろうか？

「ああ！！捕まった！！」たえちゃんが叫んだ。

パティちゃんは、遂に校長先生に捕まった。襟をつかまれ、地面から体が浮いているパティちゃん。だが、次の瞬間、パティちゃんは校長先生に何事かを耳打ちする。すると、校長先生はコチーンと硬直した。その隙に校長先生の魔手から切り抜け、また追いかけてこが續く。

「お！出た！『パティの耳打ち』！」オホーツクは手を叩いた。

「パティの耳打ち」とは、パティちゃんが危機に陥ったときに使う必殺技である。要は、ただの耳打ちである。だが、その内容については視聴者は知らされていない。一説には、相手のトラウマをささやいているのではないか、と言われている。

「はっはっは！！」

三人は、パティちゃんの大活躍に、ただただ爆笑するのだった。

そんなときだった。

「たえちゃん〜ん！！悪いんだけどこっち来て〜！！」

パパの声が、部屋の外からたえちゃんの耳に飛び込んできた。この瞬間、ようやくたえちゃんは思い出した。パパに、隠し事をしてるのがばれそうなことを。

小人二人も忘れていたらしい。三人は、思わず顔を見合わせる。パツと見、暴投するピッチャーを囲む甲子園球児のようだ。

「どどどどどど、どうしよう……」

「むむ、困ったであるな」

「やべえ、パティちゃんに夢中で、全然考えてなかったよ……」

三人は顔を見合わせて、ほぼ同時にため息を吐いた。そんな三人に追い討ちをかけるように、部屋の外からパパは言った。

「たえちゃんつてばあ〜！たえちゃんが来ないなら、パパがそっち行くよ〜？」

パパの、異様なほど優しい声。まるで、犬をあやす愛犬家のような甘ったるい声。こういう声が一番怖いことを、たえちゃんはしっかり理解している。たえちゃんは、何か背中にイヤな汗をかいているのを感じた。

「う、うん、い、今行くう〜！」たえちゃんは、結局こう言うしかなかった。いや、パパの手によって、そういう返答しか出来ないようにされた、という方が正しいだろう。

すると、パパは満足そうな声を返した。「ああ、待ってるよ」

またもや静寂の戻った子供部屋。静寂に包まれた部屋の中、ただパティちゃんのノーテンキな声が響く。

そんなパティちゃんの声をバツクに、たえちゃんはつぶやく。

「き、きつと、あなたたちのことを黙ってたのを、怒られるんだ……」

「……」たえちゃんは顔面蒼白だ。

「やばいな……」「危機一髪である！」精たちも、顔面蒼白である。

不意に、たえちゃんはスーッと立ち上がった。そんなたえちゃんを、精は目で追った。

「ど、どうするんだ？」オホーツクはたえちゃんを見上げながら恐る恐る訊いた。たえちゃんは答える。

「パパに呼ばれてるから……」

「おい、顔が青いである！大丈夫であるか！？」小笠原はたえちゃんの顔を覗き込んで言った。たえちゃんは、手をへらへら振って、

「大丈夫」という意思を表明したが、明らかに目が死んでいる。や、やばい。精二人は顔を見合わせた。

「……なあ、こんなときになんだけどさ」オホーツクは言いにくそうに言った。「パパにはオレ達のこと、黙っていてくれよな。お前が黙っていてくれさえすれば、バレやしないんだ。だって、オレ達の姿はお前にしか見えないんだから」

そう言うオホーツクを、小笠原が小突いた。さすがに、あまりに自分本位なシベリアの発言を苦々しく思ったのだろう。

「ん、頑張るよ……」たえちゃんはそっくり残すと、ふらふらと歩き、子供部屋のドアを開けた。そして、ドアを閉めようと振り返り、「頑張れよ〜!」「無理するなである!!」と口々に言う精たちに手を振って、ドアを閉じた。

どこかひんやりとした廊下。その廊下を、たえちゃんはひたひた歩く。

なんだか、気が重いなあ。

たえちゃんは、足が重くなったような錯覚に襲われつつも、まるで登山家のような足取りで足を前に進める。そして、30歩も歩かないままに、着いてしまった。

パパの、書斎に。

いつもは変哲のない、ただの扉なのだけれど、今のたえちゃんの目には地獄門とか、監獄の門とか、とにかくそういう口クでもないものの扉に見えてならなかった。そして、その扉の奥には、当然のように獄吏や閻魔様がいるんだろうな。

たえちゃんは、未来に訪れるだろう受難に、ただ震えるしかなかった。

「……パパ、パパ、来たよ」

「地獄門」に向かってそう言うと、その門の奥に控える「閻魔様」は言った。

「ああ、入っていいよ」閻魔様のクセに、やけに穏やかで、優しい声だった。

きっとこれから地獄に落ちるだろうたえちゃんは、やけに重く感じるドアを、恐る恐る、けれど力いっぱい開いた。

たえちゃんがまさに地獄門を開かんとしていたとき、子供部屋に残された二人の精は、腕を組みながら向き合っていた。

「あの雨行司、オレ達のことしゃべっちゃうのかネエ？」

沈黙を壊してオホーツクが言うと、堰を切ったように小笠原が口を開いた。

「オホーツクの。お主はたえ殿の気持ちも考えられないのであるか！？」

そう難詰されたオホーツクは、ふて腐れるようにそっぽを向いて吐き捨てるように言った。

「そもそも、雨行司の気持ちなんぞ、知った事じゃねえだろう！だって、雨行司は、オレ達にとっては敵なんだぞ！そこらへん、わかってるのかよ！」

そう吐き捨てたオホーツクを眺めていた小笠原は、不意に窓の外に視線を移した。窓の外は、雨が上がっていた。

また視線をオホーツクに戻して、小笠原はとうとうと語った。

「雨行司殿は、我らにとって敵、であるか？そもそも、ずっと昔小笠原の国と、オホーツクの国が争っておって、たくさん死者が出ておつたのを、雨行司殿の祖先、昭石法師殿が仲裁してくれたのが始まりでは無かったのではないか？『戦などはよくない』と言って、相撲の勝敗で領土を決めようとなされたのは、雨行司殿ではなかったか？おかげで、両国に戦の犠牲者が出なくなった。……そんな、大恩ある雨行司殿は、我らにとって、敵なのであるか？」

「だが！」オホーツクは、小笠原に食って掛かった。「結局雨行司たちは……てめえたちの利益のためだけに、オレ達空の精の戦にしゃしゃり出てきただけじゃねえかよ！要は、『安定した雨量が欲しいから』って理由で、空の事情にしゃしゃり出ているだけじ

「やねえか！」

「オホーツクの、少し落ち着くである」明らかに頭に血が上っているオホーツクをなだめる小笠原。明らかに落ち着き払っている小笠原は、オホーツクを見据え言った。

「うん、確かに、そういう言い方もあるう。確かにお主の言うように、雨行司殿は梅雨を思いのままに操るために、空の戦に介入しているのだ。だが、その仲裁が無くば、我々空の精は毎年戦で死んだ輩の弔いに、涙を落とさねばならないである」

「結果オーライ、って事かよ」オホーツクは、ボソツと言った。

「あるいは」そういう言い方もあるかも知れのである、と小笠原はつぶやいた。「命は、大事である」

すると、不意にオホーツクが立ち上がった。そして、ケケケ、と笑った。

「なにもおかしいことは言ってないである！」と小笠原がムツとしながら言うと、オホーツクはものすごい形相で怒鳴った。

「はは、何言ってるんだ！その理屈は、恵まれたお前達だから言えるセリフだろうが！」

小笠原の国の領土は、温暖で過ごしい所だから、『命は大事』でいいんだろうな。だがな・・・オレ達が生きている領土は、寒くて寒くて、とても生活できたもんじゃやない！だが、そんな中を、みんなで肩を寄せ合って生きてるんだ！

俺たちは、死人を出してでも欲しいんだよ！お前達の、暖かい領土が！」

空の上の領土、というのはその日によっても変動があるから何とも言えない部分も多いのだが、小笠原の国はだいたい日本の南上空にあり、オホーツクの国はだいたい東北の上空にある。やはり、空の精と言えども小笠原の国の領土のように暖かい気候の方が過ごしいのだ。

寒いところに住む精にしてみれば、無理矢理にでも暖かい領土が欲しいのだろう。

「だが」シベリアは苦々しげに言った。「雨行司と契約をしちまっ
たせいで、オレ達は戦が出来なくなつた。だから、オレ達は相撲で
領土を広げることにしたんだ。契約には、『相撲の勝敗で領土を決
める』っていう条目があるからな」

さて、と言つて、オホーツクは四股を踏んだ。

「ん？やるであるか？」小笠原も立ち上がった。

「お？」オホーツクは、意外そうな声を出した。「さつきから雨行
司の肩ばっかり持ってやがるから、取り組みをやらぬとか言い出
すかと思つたが・・・」

「ぬかせ」小笠原は返した。「相撲を一日3回取るのは、『契約』
である。それを果たすのが、義務である」

というか、小笠原にしてみれば、相撲を取ることに何の異存も
ない。

確かに雨行司が相撲の勝敗を自分勝手に裁定するには腹が立つ
から、できるだけ雨行司にはこの相撲には参加させたくない、とい
う気持ちはある。

だが、「恵まれた」小笠原の国の精としては、過度にシベリアの
国の精が自国領土に侵入しないように取り計らってくれる雨行司に
感謝している面もある。

裏返しに見れば、それはオホーツクの国の悲願、「暖かい領土を
手に入れる」という夢を、雨行司が邪魔していることに他ならない
のだが。

「さあ！相撲取るである！！」小笠原は、出ているおなかをポンポ
ン、と叩いた。

「よし、望むところだ」オホーツクの目が、冷たく光った。

二人の精は中腰の姿勢で向き合った。そして、オホーツクの「は
つけよい！」という掛け声にあわせ、互いにぶつかつていった。

まわしがないから、お互いにお互いの服を掴むような格好になつ
た。相撲というよりは、柔道に近い。だが、柔道と違ふのは、お互
いに、明らかに前のめりな姿勢である、ということである。

「くっ!!」「ぬん!!」

お互いに、顔が真っ赤である。片方が襟を掴んでは引き剥がされ、片方がズボンを掴んではそれを払いのけを繰り返す。ぱっと見、子供のケンカのようにも見える。だがそのうち、二人に疲れの色が出てきた。

「うぬ!!」「オウウウ!!」

などと威勢のいい声が響くのはいいのだが、もはや声しか出ていない。腕に殆ど力は入らず、足ももつれかかっている。

これをチャンスと思ったのか、小笠原は右足をオホーツクの後ろに回し、その足に引っかけオホーツクの体勢を崩そうとした。いわゆる、「大外刈」である。

だが、小笠原は気づいていなかった。小笠原自身に、そんな力は残っていなかったのだ。

大外刈は一瞬、仕掛ける側が無防備になる。仮に体力が残った段階だったならば、たとえ無防備になってしまったとしても、なんとかパワーで押し切れないこともない。

だが、この隙をオホーツクは見逃さなかった。

オホーツクは、逆に体勢が崩れかかっている小笠原を力で返す。

「ぬおっ!!」

小笠原はオホーツクの押しに負け、地面に崩れ落ちた。

「へっへ、オレの勝ち、だな」肩で息をしながらオホーツクは言った。

「うむ、負けたのである」負けた小笠原も、なぜか嬉しそうだった。

「な? 正々堂々、っていうのも、いいもんだろ?」そんな小笠原の顔を見て、オホーツクは微笑んだ。

「……そうなのかも知れない。小笠原は思った。

正々堂々。兩行司殿が裁定する相撲では、けっしてありえなかった言葉。だが、兩行司殿がない、ただそれだけで、こんなに楽しい相撲が取れるなんて。

正直、小笠原は正々堂々と相撲を取りたいのだ。

「いい、ものである！」小笠原は、人懐っこい笑顔を浮かべ、腹鼓を打った。

二人が相撲を取っている丁度そんな頃、書斎では今まさにたえちやんの受難が始まらんとしていた。

「ん？どうしたの？たえちゃん？顔が真っ青だよ？」

“閻魔様”は生卵を扱うような優しい口調で言葉を発した。だが、机の向こうの椅子にどっかりと座っているパパの様子に、たえちやんは妙に戦慄が走る。というか、優しい声で語りかけてくるだけに怖いのだ。生卵を優しく扱うのは、「割りたくないから」である。逆を言えば、ふとしたきっかけで割れてしまうことを恐れているのだ。

「……………ん、なんでもない」ようやくたえちゃんがひねり出した言葉がこれだった。

「そう？心配だなあ」パパは頭をかいた。

自分のパパに感じる妙な威圧感に、つききよろきよると辺りを見渡すたえちゃん。

書斎の中には、木目調の机と、黒いふかふかの椅子、そして、夥しく本棚でひしめき合う本の姿があった。この書斎にはかつて窓があったのだけれど、本棚に潰されてしまった。そのために、ものすごく暗く、空気もよどんでいる（ような気がする）。そんな中で、おしくらまんじゅうをしているような本たちが、たえちゃんを見下ろしているようにも見えた。

「さて……………」

パパは、机の引き出しを開き、紙を取り出した。なんだか、図形やら、文字やらが書いてある。

「いや、パパさ、絵本書いてみたんだ。だから、たえちゃん、読もう？」

ママによると、パパはかつて絵本作家志望だったという。だが、

結婚を期に、そういう「浮き草」な夢を捨てたらしい。パパにはパパなりに思うところあったのだろう。やっぱり、一家を支える責任というものがパパの頭によぎっただろうし、またパパの家には「兩行司」のお役目があるから、やはり安定を求めたのは当然のことと言えるのかもしれない。

だが、時折パパは絵本を書く。そして、たえちゃんに読み聞かせる。

夢に未練でもあるの？とママが訊くと、パパは笑って、

「はっは、趣味さ」

と答える。だが、それが本心かどうかはパパだけが知っている。

たえちゃんは、パパの絵本が割と好きだ。話自体はけっこう他愛の無い寓話だったりもするのだけれど、作者の意図がわかりやすくていい。だが、それ以上に、嬉しそうに自分の絵本を朗読するパパの顔を見るのがたえちゃんは好きなのだ。パパの、まるで屈託の無い笑顔が。

・・・なんだ。パパ、絵本書いてたのかあ。

たえちゃんは、思わず胸をなでおろす。

「ん？何してるの？たえちゃん、おいで」

パパは自分の膝をポンポン叩く。

たえちゃんはトテトテとパパの前まで近寄った。するとパパは、たえちゃんを持ち上げ、自分の膝に乗せた。

「いやあ、たえちゃん、重くなっただなあ」

パパが思わずそうつぶやくと、たえちゃんは不服そうに頬を膨らました。

それに気づいたのか、パパは慌ててフォローする。

「あ、ああ！レディーに重いなんて失礼だね？」

するとたえちゃんの頬は、結び目を解いた風船のように、プシューとしぼんだ。そして、ニコツと笑った。

我が娘ながらかわいいなあ、とパパは思った。その後すぐ、ああ、オレって親バカだなあ、と思い直す。

「ねえパパ、早く読んでよ」

パパの膝の上を、トランポリンで跳ねるようにバンバン跳ねるたえちゃん。おねだりにしては暴力的であるが、これがいつものパターンである。

「ちよつと待ってね」

パパはたえちゃんを膝に乗せたまま、机の引き出しに手を掛けた。「まだ？」

まるで恋人に甘える女の子のような声を上げるたえちゃんに、「この子、将来男の子をアゴで使うような女の子になるんだろうか」と微妙に危機感を持つパパであった。だが、パパは気づいていない。そんな心配、十年早い。

パパは、引き出しから真っ白な紙とペンを取り出し、机の上に置いた。どうたら、絵本ではないらしい。

「さて、準備完了！！」パパはニコつと笑って、そう言った。

「じゃあ読んで！！」たえちゃんは、パパの膝の上からパパの顔を覗き込んで言った。

パパは、思った。

今から僕がやることは、果たしてやっていい事なのだろうか、と。これから僕は、間接的とはいえ、雨行司に介入しようとしている。果たして今やるうとしていることが雨行司家の決まり、「雨行司には介入しない」という決まりを破るのかどうか。

でも、恐れていては何も変わらない。

僕は、変えようと思ったんじゃないか。

新しい雨行司のあり方を、手探りでも探っていこうと決めたんじやないか。

「ねえ……まだ？」

無邪気に膝の上に座るたえちゃん。

そんなたえちゃんを一撫でして、パパは自作の絵本を読み始めた。

パパは、コホン、と咳払いをしてから題名を読んだ。

「二つの国の話」

「二つの国？」たえちゃんは、不思議そうに訊いた。

いつもパパが作るのは、「小人と蝶の話」とか、「クマとその弟の話」といった、比較的ミクロな話である。そんなパパが、「国」なんていうマクロなものを題材に絵本を書くのは珍しい。そもそも、まだまだ小さいたえちゃんには、「国」というもののスケールをまだしつかりとは理解していない。たえちゃんにとっては、パパがいて、ママがいて、そして自分がいる。これが彼女にとっての「国」なのだ。

パパは一枚目の絵を取り出した。二つのキレイなお城が並んでいる、そんな絵だった。パパは続ける。

「昔、あるところに、二つの国がありました。」

一方の国の人たちは陽気で、もう一方は陰気でしたから、二つの国の間では争いが絶えませんでした。

それは例えば、子供のケンカのようなものなのかも知れませんでした。“このおもちゃは僕のだ” “いや、僕んだ” っていう程度のこと……。彼らが争っていたのは、国境付近の畑の作物でした。お互いに、「その作物は俺たちのものだ」と言っていて訊かず、ケンカになっていたのです。」

ここまでパパが読み進めると、たえちゃんは哀しそうな顔で言った。「ケンカは良くないよ……。」

「うん、そうだね。ケンカは、よくないよ」パパは、膝の上に乗る我が娘の頭を撫で、話を先に進めた。

「『そのうち』」パパは、次の絵をめくった。「『二つの国の間で戦争が起りました』」次の絵は、お城がお互いの攻撃で崩れかかっているような絵だった。

「センソウ、って何？」たえちゃんはアゴを上げて、パパに訊く。
「うん、国同士がケンカする、ってことだよ。でもね、ケンカとはまったく違うんだ」

「どう違うの？」重ねてたえちゃんは訊いてくる。

「戦争ではね、人が大怪我したり、死んだりしちゃうんだ」

「死んじゃう？」たえちゃんには、いまひとつ「死」というものに実感が持てないらしい。それはそうだ。まだ4歳の子供に、「死」など判るはずもないし、判っちゃいけない。

パパは、さらに進める。「一日に何百人も死んでしまうような、そんな戦いでした。戦争で死んだお母さんやお父さんを想って、国中の子供たちが涙した頃、二つの国に……」

またパパは、絵をめくった。

「『吟遊詩人さんがやってきました』」 いかにもそれっぽい吟遊詩人が、紙の上に描かれていた。

「『吟遊詩人は言いました』」と、パパは続ける。

「『戦争なんて、バカな事はやめなさい。戦争は、悲しみを呼ぶばかり。何の解決にもならないじゃないか』」

しかし、二つの国の人たちは納まりません。

「でも、オレ達は、アイツの持っている作物が欲しいんだ！」「僕らも、あいつらが持っている作物が欲しいんだ！」と、口々に言うのでした。

そこで、吟遊詩人は言いました。

「じゃあ、二つの国の代表が、テニスをすればいい」

「テ、テニス？」二つの国の人々は顔を見合わせました。

「テニスの結果次第で、国境付近の作物の取り分を決めればいいじゃないか。そうすれば、死人は出ない」

二つの国の人々は、そんな吟遊詩人の言い分に納得しました。そして、一年に一回、テニスで作物の取り分を決めることにしました。二つの国の人達は、その詩人に審判をお願いし、詩人はウン、と言いました。

そして、テニスの試合が始まりました。」「パパは、また絵をめぐった。テニスコートの絵だった。

「『けれど、テニスの試合中、審判をしている吟遊詩人は考えました。もし、どちらかが勝ってしまったら、負けたほうは勝ったほうをきつと恨むだろう。』」

そこで、吟遊詩人は……。ズルをしました。

テニスの得点をいじって、ほぼ互角の勝負にしたのでした。

そして……試合の結果、25対23で陽気な国が勝ちました。負けた陰気な国の人たちは悔しがりましたが、作物のほぼ半分をもたらえたのでしょうがないか、と諦めたのでした……。」「

書齋に、しばし沈黙が流れた。

「ど、ど、どうだった？」パパは恐る恐るたえちゃんに訊いた。すると、たえちゃんはじとじととした目で答えた。

「つまんない」 バツサリ、であった。

やっぱり、僕には才能ないのかな、とパパは心の中で苦笑いをしながら言った。

「どこがダメだった？」

「うーんとね」たえちゃんは評論家みたいな鋭い目をした。「ジンさん、ズルはいけないよ」

お、釣れた。パパは心の中でガッツポーズを決める。そう、たえちゃんに気づいて欲しかったのは、そこなのだ。

パパは、用意していた言葉を述べた。

「そうだね、ズルはいけないね。でもね？詩人さんは、ズルしなきゃなんなかったんだ」

「どうして？」たえちゃんはパパの顔を見上げて訊いてきた。パパは答える。

「だってさ、もし、陽気な国が、25対0で勝ってたらどうなる？きつとき、陰気な国の人は、陽気な国の人を恨むと思うよ？」

「でもそれは、ジコセキニン、じゃないの？」

「よくそんな難しい言葉知ってるねえ」

「パパがそう言うと、たえちゃんはフフン、という顔を見せた。幼稚園で習ったんだもん！」

全く、最近の幼稚園は身も蓋もないことを教えるなあ、とパパは心の中でため息を吐きながら続けた。

「でもね、“弱いから”って切り捨てちゃっていいのかな？例えばさ、パパとたえちゃんんで腕相撲してさ、その結果でおやつを取り分を決めるとするよね。でも、パパの方が力は強いから、おやつはみんなパパのものになっちゃうよ？それでもたえちゃんは、「ジコセキニン」なんて言える？」

「イヤー！」たえちゃんはそう言った。

「だから詩人さんは」パパは言った。「ズルをしたんだ、きつと負けるほうを可哀想に思ってたね」

「……うん……。」たえちゃんは、頭を垂れて考えている。

よし、たえちゃんは落ちた。あとは……。

パパは、たえちゃんを抱きしめたまま立ち上がると、たえちゃんをさつきまで自分が座っていた椅子に降ろした。

「たえちゃん、ちよつと、ここで待っていてくれる？」パパは、たえちゃんの頬を撫でながら言った。

「パパ、どこ行くの？」

「うんと、ヤボ用」

「ヤボヨウ？」その意味がわからないらしく、たえちゃんはキョトンとしている。だが、すぐにパパに言われた言葉を自分なりに理解しようと、ウンウン唸っている。

パパは、そんなたえちゃんから手を離すと、書斎のノブを回して、廊下に出た。

たえちゃん、ごめんな。廊下を歩きながら、パパは心の中でこうつぶやく。

パパはわかっているのだ。

さっきたえちゃんに話した、「吟遊詩人のズル」なんて、通用しない。

二つの国の間で代理戦争たるテニスをしその結果で作物の取り分を決める、という「契約」をした以上、負けた国が損をするのは「ジコセキニン」なのである。だが、そんなことを言ってしまうえば、彼女にあんな話をした意味がない。

パパは、たえちゃんに、「雨行司としての公平さ」を教えたのだ。雨行司にとって、公平、というのはあくまで50/50な分配なのだ。だから、パパはあんな話をたえちゃんにしたのだ。

ちなみに、「サラバ戦争！！」が役に立ったのは、「戦争反対！！」っていう、頑固なまでのかたくなさ、である。やっぱり子供に響くのは、かたくなな論理のかなあ、とパパは思い出しつつ苦笑いする。

でも、あの話をしたのはこれだけが理由ではないだろう。

きつと、パパは自分の娘に、「負けた人間の痛み」を理解できる人間になって欲しい、という願いがあつたのだろう。

とにかく。パパは咳払いをした。たえちゃんはもう落ちた。とりあえず、あの子は雨行司としての役割を果たすだろう。

だが、問題は……。

思っていることが、思わず口からこぼれ出る。

「相撲を取る側、か」

パパは、子供部屋の前で足を止めた。中からテレビの音が聞こえる。

パパは、ドアノブに手を掛けて回した。そして、ドアを押した。テレビの音がけたたましく響く室内に、パパは入った。そしてドアを閉めると、パパは部屋を見渡した。

狭い部屋の中に、暖かい空気と冷たい空気が混じっている。

「雨行司之事」によれば、彼ら空の精の内、「南之精」は赤い装束と暑い空気をまとい、「北の精」は青い装束と冷たい空気をまとう、という。

なるほど。ということはこの部屋の中にその二人がいる公算が大だな。パパはニヤリと笑う。

「いるんだな」

パパは、姿の見えない精たちに話しかけた。だが、返事は聞こえない。

「雨行司之事」によると、元雨行司とも言えども、精の姿はもちろん、声も聞こえなくなるらしい。それも全く「雨行司之事」に書いてある通り。

「まあ、聞けよ」

そう言うと、パパはテレビの前に立ち、テレビの電源を切った。今、ようやく「パティちゃん獄遊記」のオチの場面だったようだけれど、パパは思いつきり電源ボタンを押した。一瞬、剃刀のように鋭く冷たい風がパパの頬に当たった気がしたけれど、気のせいだろう。

パパは、言った。

「約束、守れよ」

室内の暖かい空気、冷たい空気は渦巻いている。

「昔、僕のご先祖が、お前達のご先祖と約束したんだろ？『人間の行司を挟んで相撲をして、その結果次第で領土を争う』ってさ。その約束守ってくれないと困るんだ。人間としてはね」

暖かい空気と冷たい空気が、波状攻撃のようにパパの頬に当たる。きつと、反発してるんだ。差し詰め、「お前達のエゴで相撲させられてるんだぞ、俺たちは！」ってな所だろう。そんな空気を感

つ、パパは続けた。

「うん、悪いとは思ってるよ。そもそも、空の事情に僕ら人間は介入しちゃう本来はいけないはずだ。

でもさ、介入しなきゃなんないんだ。だって、お前達の国境の真下では、大雨が降るからだ。こちらとしても、あまりに雨が降らなかつたりすると困るんだよ。もしお前達の領土の都合がこちらに影響なければ、別にどうでもいいんだ。

でも、こちらでも死活問題なんだ」
パパは続ける。

「この時期雨が降らなかつたら、飲み水が手に入らない。作物も育たない。工業用水も手に入らない。困るんだ」

暖かい空気が部屋の隅に集まり、おとなしくなった。

よし、「南の精」は丸め込んだ。パパは心の中でガッツポーズを決めた。

あとは………。

パパは、部屋の隅から中心へ視線を向ける。パパの視線の先には、まるで毒蛇のようにとぐろを巻いた冷たい空気があった。

そんな冷たい空気、いや、「北の精」に、パパは訴えた。

「わかつてる。お前達「北の精」の状況。

僕のご先祖も書いているよ、「北の精の国は寒く、精にとっても暮らしにくい」って。我慢しろ、とは言わない。いや、言えない。言える立場じゃない。でも」

パパは、頭を下げた。

「妥協して欲しい。僕らは、同じ世界に生きている。そうであるからには、互いに我慢しつつ、妥協しつつ生きてくしかない」
パパにはわかっている。

この理屈は、「恵まれたもの」の理屈なのだ。

今の空の精たちと人間の関係において、一番ワリを食っているのは間違いなく「北の精」だ。寒いところに押し込まれた上、暖かいところに出ようとすると人間に邪魔されてしまう。少しでも条件の

いいところに我が身を置きたい、と考えるのは確かにエゴだ。でも、それを押しとどめることは誰にも出来ないはずだ。

だから、パパは頭を下げた。

僕らの生活があるのは君らを踏みつけにしているからだ。

それは、わかってるよ。だから、僕は頭を下げるんだ。

パパは、そんな万感の思いを込めて、頭を下げた。

とぐるを巻いていた冷たい空気は、「ケツ！」とでも言いたげに、一瞬その形を変えた。そして次の瞬間、とぐるは消えた。

「ありがとう」パパは言った。

人間のわがままを聞いてくれて、ありがとう。

パパは、テレビの電源をまた点けた。もうテレビ番組は、夜のニュースになっていた。

パパは、子供部屋をあとにした。

「パパ！お散歩行こうよ！」

たえちゃんは七月の太陽のような眩しい笑顔を見せ、言った。

パパは「めんどくさいなー」と思いつつも、ママが「運動不足なんだから行きなさいよ！」って言うものだから、行かざるを得なくなった。そんなパパは、スニーカーの紐を、まどろんだ手つきで結んだ。

外は晴れていた。こんないい天気は久し振りだな、と、パパは腕で目に入る、真夏の太陽光を遮った。

あの、たえちゃんに絵本を読んであげた日から、梅雨は息を吹き返した。

連日のように雨が降り、結局、例年通りの降雨量に達した、と、有名政治家の次男で、タレントでもある某気象予報士がテレビで言っていた。それはそれで問題のような気もするが、まあ結果オーライなのだろう。そして、梅雨の季節は、去った。

たぶん、たえちゃんも精たちも、すっかりお役目を果たしたのだろう。

精達は自分達の領土を決める「代理戦争」の。そしてたえちゃんはその代理戦争の調停者としての役を。

パパは、そんなことをななしに考えながら、太陽光でキラキラ輝く道路の真ん中を、まるで子犬のようにテクテク歩きたえちゃんの後姿を眺め、歩いた。

「あれ？アジサイさんが・・・」

不意に、たえちゃんが声を上げた。

たえちゃんの方を見ると、梅雨のころには精一杯咲き誇っていたアジサイの花が、太陽の熱で干上がってしまったかのように、色が褪せていた。

梅雨が去り、梅雨を告げる花も、いつしよに去ったのだ。

「・・・死んじゃった」

たえちゃんは、死んだように枯れるアジサイを、肩を落として凝視している。

「それは違うよ。たえちゃん」

パパは、たえちゃんの形のいい頭を撫でて、続けた。

「アジサイは、死んでないよ。ほら」パパは指差した。たえちゃんが、パパが指差した方を見ると、アジサイの葉が、かつて咲き誇っていたその花のように、精一杯空に向かって伸びきっていた。それを見て、たえちゃんは「ああ・・・」と声を上げた。

「ね？」パパは言った。「死んでないよ。また、帰ってくるよ。」

雨が降りしきる、梅雨の季節になれば

「うん！！」たえちゃんは、満面の笑みをパパに見せた。きつと、たえちゃんは待ち遠しいのだろう。梅雨の、あの季節が。

また、二人は歩きだした。

太陽光で照らされ、じりじりと焼ける空気。そして、どこからともなく聞こえるニイニイゼミの歌う声。

ああ、麦わら帽でも持つてくればよかったなあ、と、パパは少し後悔した。そうすれば、少なくとも太陽光は防げるのに。

時折、前を歩きたえちゃんは、まるで何かを伺うように振り返る。後ろ手をまわして、ヒョイ、って。きつと、パパが歩くのが遅いので、歩調を合わせようとしているのだろう。

パパは、急かされているような気がして、ちよつと歩調を速めた。一方のたえちゃんは、歩調を緩め、パパの横に並んだ。

一緒に連れ立って歩くためには、誰かが妥協するしかない。例えば、歩調の速いほうが、遅いほうに合わせる。でも、一人が妥協するより、皆で妥協した方が、負担は結局小さい。お互いの、精神的な負担は特に。

「へへ」

たえちゃんは、パパの手を、すぐるように握った。

「どうしたんだい？」

するとたえちゃんは、はにかんだような笑顔で、言った。

「なんでもなくいい！」

パパは、たえちゃんの手を、強く握り返した。

小さな小さな手。そんな小さな手も、きつと成長する。そのうち、僕の手を握ってくれなくなる 때가来る。だから、この感触を覚えておこう。

パパは、気が早いながらも、そう思った。

「ねえ、パパ」

たえちゃんは、さっきまでの笑顔とは裏腹な、沈んだ顔を見せた。

「ん？」

パパには、たえちゃんは何を言い出すか、なんとなくわかった。だけど、黙っておく。

たえちゃんは、パパに、言いにくそうに言った。

「……パパに、隠し事してたの」

やっぱりあのことか。パパは思った。パパはたえちゃんを撫で、言った。

「うん。そうみたいだね。でもね、たえちゃん」パパは、空に目を遣って続ける。空には飛行機雲が続いていた。「パパは、嬉しいんだ」

「え？」怪訝そうな顔を見せるたえちゃん。

パパは続けた。「たえちゃんは、パパに秘密を持てるくらい大人になっただね」

子供は親に秘密を持つようになると、一つ成長するものだ。

その秘密が仮に親から見れば筒抜けのものだとしても、子供が親から何かを隠そう、とする行為自体が、大人の階段を上る、大事なステップの一つなのだ。その階段を、娘がしっかり上っていることを確認できて、パパは嬉しいのだ。

「でもね」パパは言った。「秘密、っていうのは褒められたもんじゃないな。ばれたときには、しっかり謝るようにね」

「うん、ごめんなさい」たえちゃんは、大きな頭を上下に振った。
「うん、よろしい」

秘密、嘘、ズル。とパパは思った。
確かに、それらは悪いものだ。

だけど、大人になるとわかる。それらのものが無ければ、この世界は周らない。正直、真実、正々堂々、これだけじゃ世界は動かない。ときには、都合の悪いものを隠したり、抜け道を通らないことには、僕ら人間は生きられないのだ。

でも、出来れば。パパはたえちゃんの顔を眺めながら思った。この娘には、秘密とか嘘、ズルを、人の痛みを慰めるために使える人間になつて欲しいな。

「ねえ、パパ！」たえちゃんは、怪訝そうな顔をしてパパの顔を覗きこんで言った。「何でそんな怖い顔してるの？」

「え!？」顔に出たか、と、パパは顔をぺしぺし叩いて笑顔に戻した。「なんでもないよ」

たえちゃんも笑顔になった。「うん!!」
二人は、ニコニコ顔を見合わせながら陽光でキラキラ光る道を歩いていった。

そんな二人の横を、暖かい風と冷たい風が、まるで挨拶するかのように吹き抜けて、夏の空に消えていった。

【12】(後書き)

完結しました。皆様のご感想、ご批評お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3579c/>

梅雨戦線

2010年10月22日00時33分発行